

100人のまちと1000本の木 -営みの重なりで風景を描く研究-
A town for 100 people and 1000 trees -A study on the landscape with layered interactive activity-

研究概要

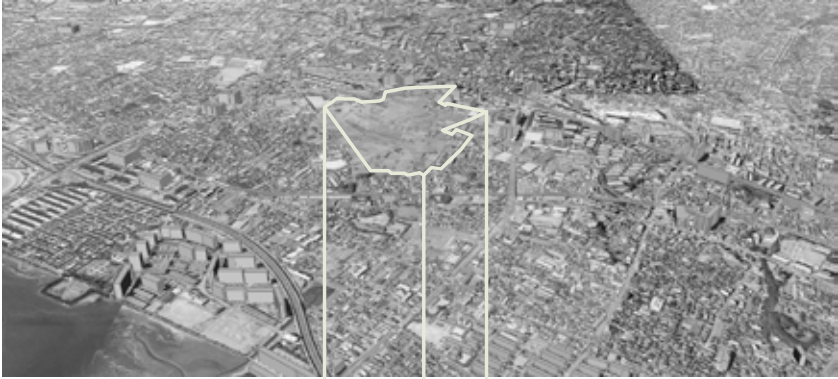
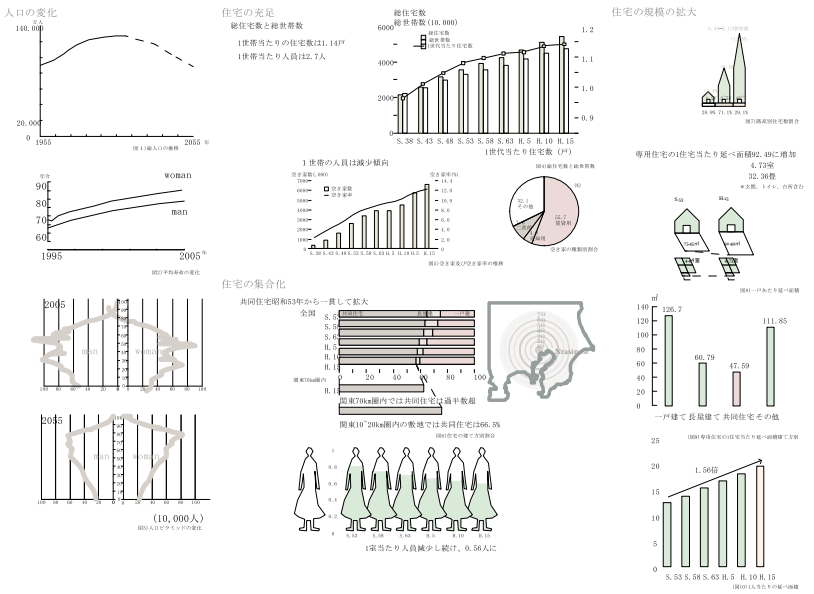
人口減少社会への突入が現実のものとなり、現代都市には空き家が急増しているにも関わらず、巨大住宅地開発はやむことなく続いている。そこに人は見えず、資本の倫理があからさまに顔を出している。こうした風景の違和感から、一人一人の生活の営みが重なり合う事で生まれる魅力的風景（物語）の提示を試みたのが本研究である。

対象地は習志野市南口都市計画が進行する谷津農地とした。ここは津田沼駅至近でありながら農業風景が広がる奇跡的場所であり微地形に富んだ魅力的な風景をもつこの場に住宅地開発のマスタープランが描かれ、工事が現実に行進しつつある。この中心地に100人の主人公とその家族のための100軒の家と1000本の樹木を、物語を描くように、風景として描く。そのためにまず100人の顔が具体的にスケッチされ、その生活を小説のように描くことによって想定された。

設計は100ロットを当分に分配することからはじめ、そこに地形の反映、都市計画道路の一部を受け入れ、敷地の譲り合いなど、あたかも100人が話合うように進行する。各々の家は個別のライフスタイルが反映され、同じよう違う、差異と類似のネットワークを形成する。最終的に表現された風景は、すべてがプライベートな場所でありながら、パブリックスペースであるような、懐かしさをもつ。

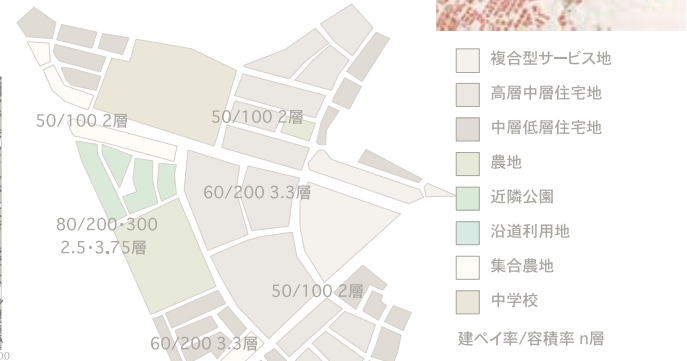
* 計画地

計画地は千葉県習志野市(図12)、JR津田沼南口駅前開発(図13)が進められている、農地の一部である。市街化調整区域に指定されていたために、36haにも及ぶ農地が今に残されてきた。(図14)現在は都市計画が進み、商業、低層から高層住宅、公園、等が配備され、国道3.5.6が延長、区画道路が敷地内に張り巡らされる予定である。上下水道が配備され駅前の玄関として、良好な住環境と景観を生み出す計画である。



* 調査

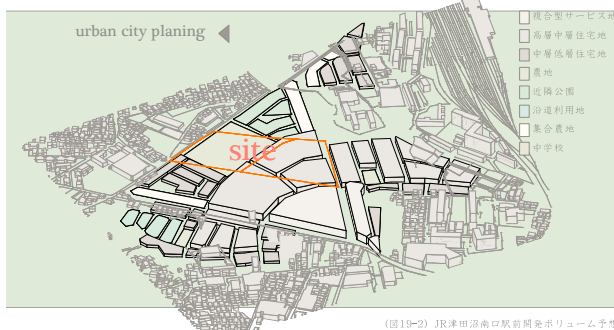
敷地内は農地と小径のふたつの要素で構成されている。農地は農業従事者のみで使用している。小径は周辺の住民に利用されており、中学生のランニングコースとして使われていたり、散歩や通学路として、幅広い世代のひとに使用されている。(図15)このことから、新規住民だけでなく、周辺のひととの交流の場としてのポテンシャルをもち、提案に活かしたいと考える。また敷地内の風景は、微妙な高低差があるために、今いる場所と離れた場所が、お互いに背景になりあって作り上げられていると感じた。(図16)



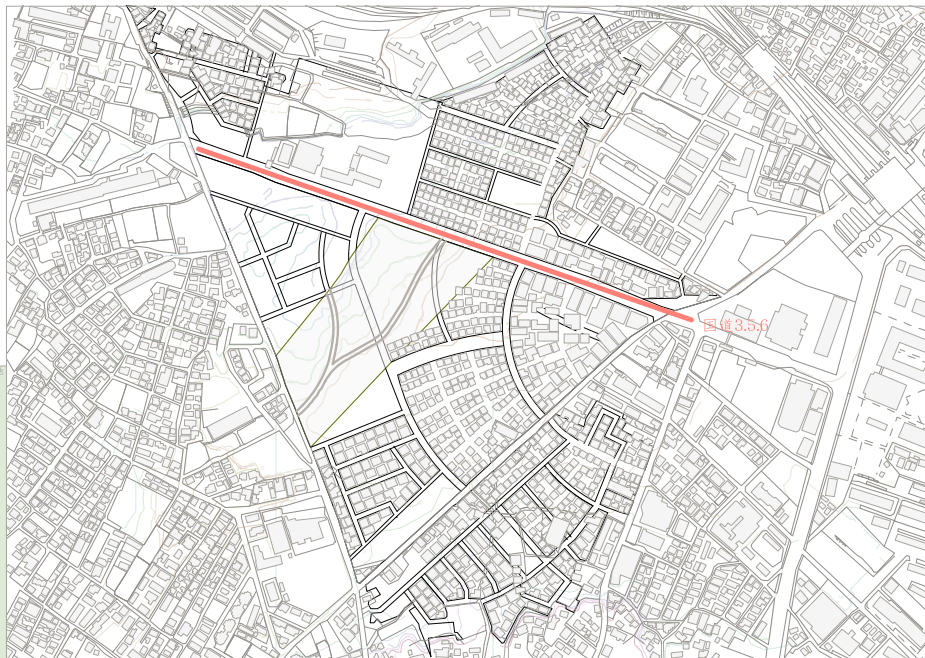
*提案
提案に祭し都市計画をそのまま通した部分、提案した部分を以下に示す。

(1)計画されている国道3.5.6と区画道路を通す

これは敷地内が都市計画と相反する計画ではなく、都市計画に沿って、周辺が開発されたときに、一部分に提案のような広かった空間を切り込むことで、そこに住む住民とその周りに住む住民との空間になると考えたためである。(図17.18)



(図19-2) JR津田沼南口駅前開発リユーム予想図



(図17)JR津田沼南口駅前開発地区予想地図S=1:10000

(2)用途地域に従い、これを格子状に混じり合わせる。
公園と住宅を切れたものとしてではなく、公園のように使われる庭が住宅の周りに出来ることで、それぞれの住民の表情の感じられ、周辺の住民と関係性の生まれる空間となる。(図19.20.21.22.23)

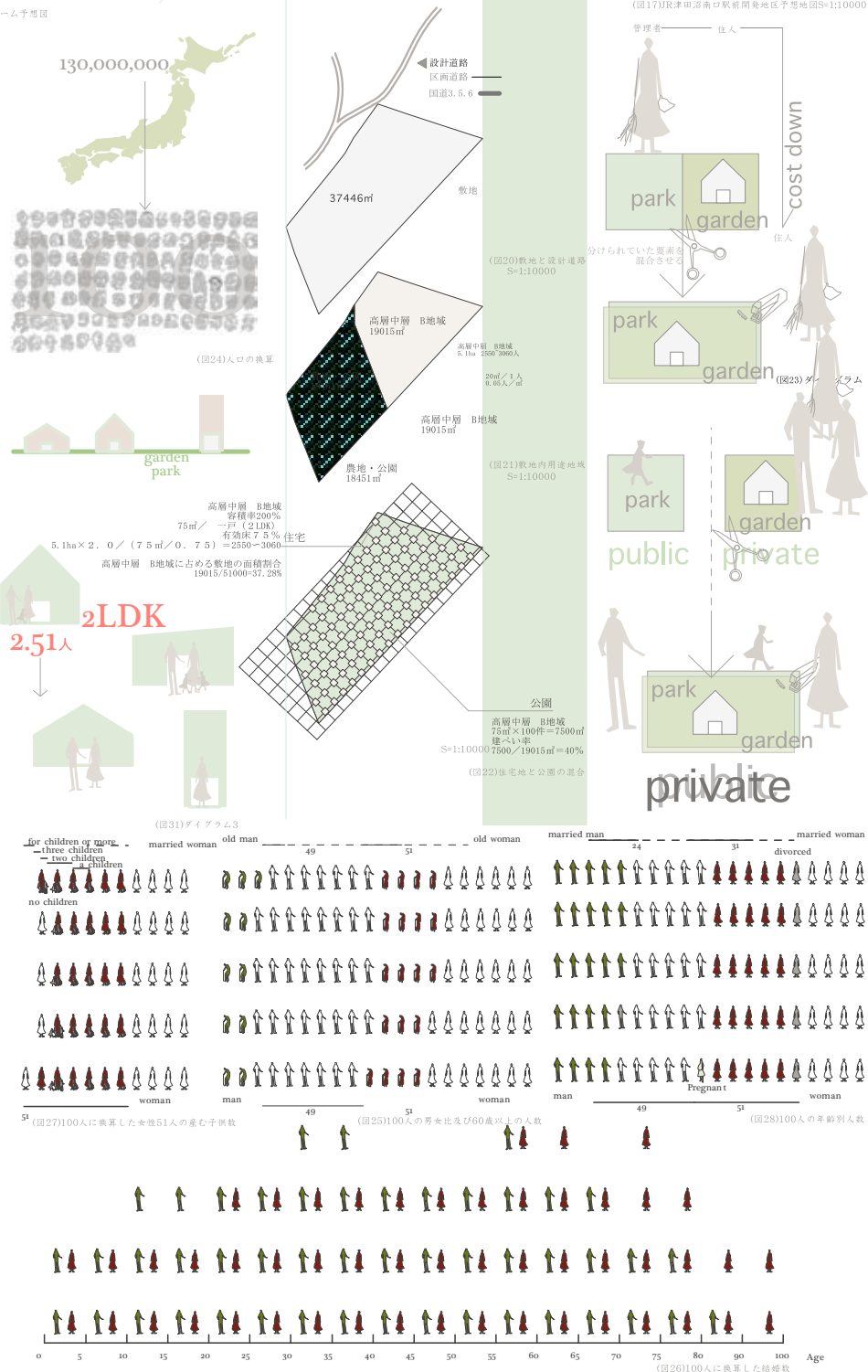
(3)100戸に住む100人を想定し住宅100戸をグリット状に並べる。

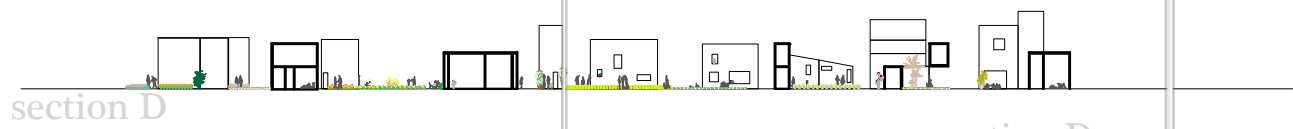
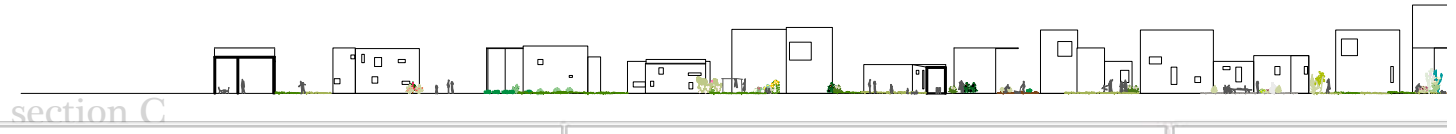
本来都市計画で計画されているような平均的家族ではなく、日本の人口を100人に換算して想定されたひとりひとりのための家を考える。一人一人は人口換算によって性別、年齢、家族構成等を決めた。また隣接することが関係性を紡ぐとは考えなかった。敷地の調査により、畑で隔たれている農業従事者と周辺住民が関わっているのが観察された。距離を取りながら関係を育めることが、この土地に相応しいと考えた。グリットにすることで距離間を持ちつつ、関係性を持つ可能性を残すことが出来たように思う。(図24.25.26.27.28)

(4)住宅のまわりの庭は公園のように（パブリックな公園として）他のひとが使用することが出来る。
農地を調査した際、農地と農地の間を多くの周辺住民が利用していた。しかしながら農地に侵入するのは子供のみであった。広い私的な場としての農地ではパブリックな空間には成りえないのではないかと考察した。かといって公園として広い場を作るのはアクティビティを生まないように思った。そのため、私的空間から離れすぎず、遠からずな、家と家の間に公園のような場を作った。庭を私的に使うことでいろんな表情が生まれる。また私的な庭を公的なものとして解放することで低密度な住宅を高価にならず提供できると考えた。(図29.30.33)

(5)住宅はひとつひとつ異なる。
ひとりひとりの性格、関係性の取り方によって形、配置が微妙に異なる。100人の異なる人を想定しているため、家族構成や、広く取りたい場所、周囲への関係性の持ち方等によって、異なってくる。競って大きくなりたい家や、右にならえのような家、家の風景を見ているだけで、そこに住んでいるひとがみえてくるものを目指した。(図31.32)

(6)住宅は借家、及び分譲とする。
これは100人が永続的な土地に根づいた、農村のような関係を築くことを想定しているのではなく、あくまで100人は日本のどこにでもいるようなひと、を想定しているのであり、1人が他の誰かと変わっても、関係性の生まれる可能性をもつことを前提としているためである。

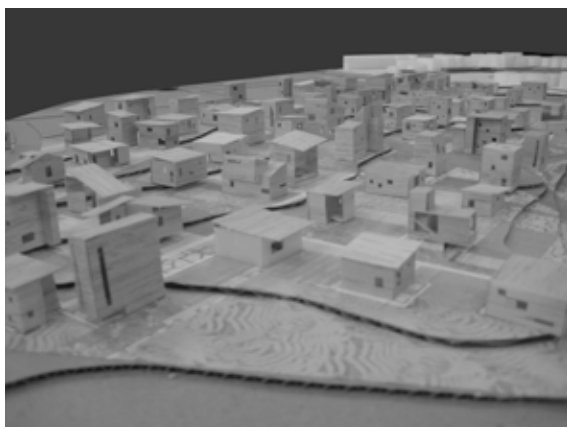




section D

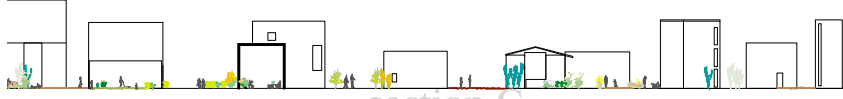
section B

section C



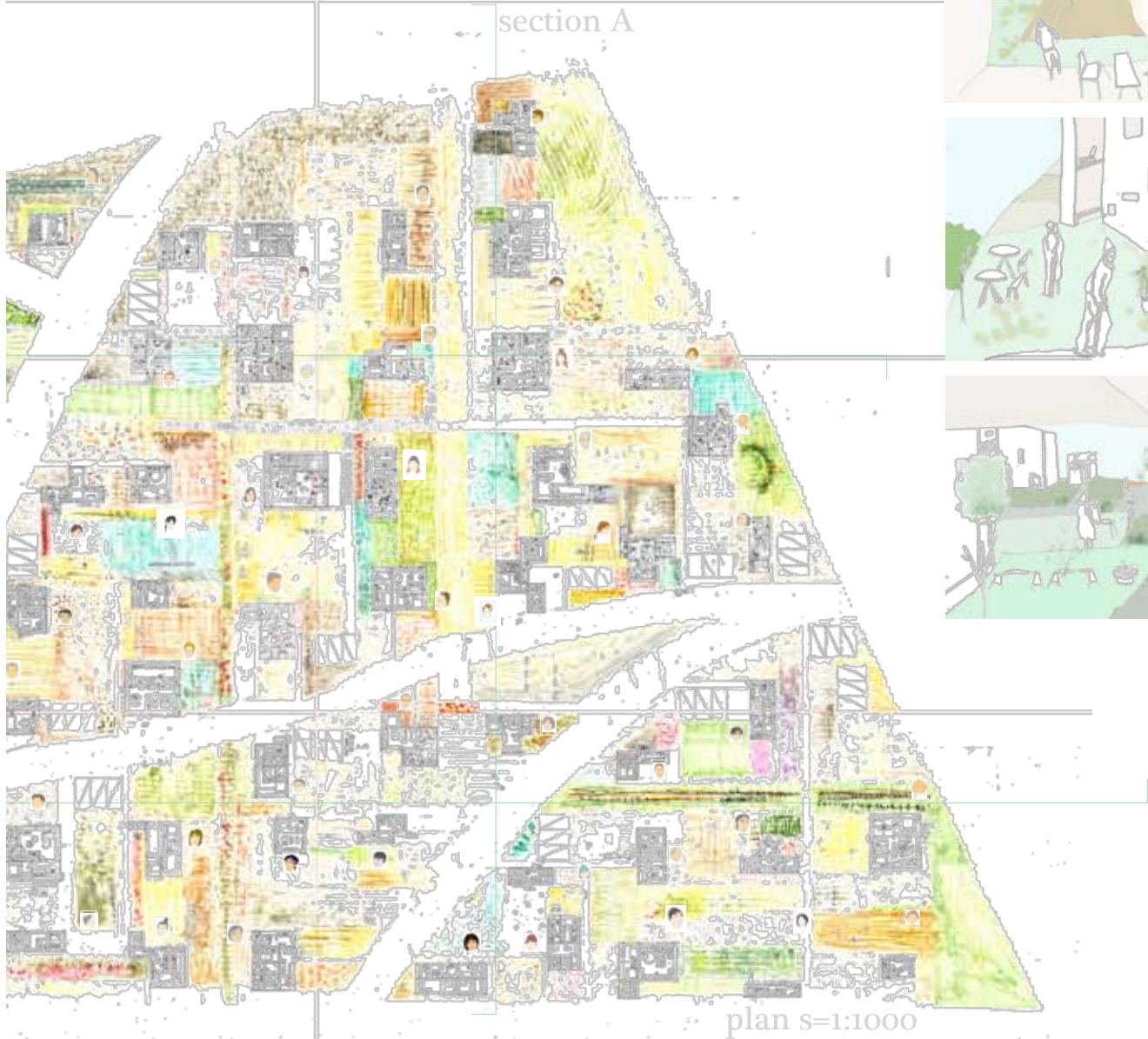


section B



section C

section A



plan s=1:1000

